九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

校注驚鴻記(三)

呉, 世美

竹村, 則行

https://doi.org/10.15017/2559294

出版情報：文學研究. 92, pp.19-42, 1995-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

校注驚鴻記㈢

（明）呉　世　美　著
（日）竹　村　則　行　校注

はじめに

一　楊貴妃故事を集大成させた清・洪昇の名曲『長生殿』の構想や表現に大きな影響を与えたと思われる明・呉世美の『驚鴻記』に就いては、これまで僅かに『古本戯曲叢刊』二集に影印資料が公表されたのみで、正面から研究の眼が向けられた事は無かった。本稿では、研究の基礎資料を提供する為に、その一部翻刻を試みることにする。

二　本稿は、前稿「校注驚鴻記㈠・㈡」（九州大学文学部『文学研究』第九十・九十一輯、平成五・六年三月）に続いて、明・呉世美『驚鴻記』に付された清・葉徳輝の序、および第十三齣「梅妃被貶」、第十五齣「學士醉揮」、第十六齣「梅妃宮怨」、第二十三齣「七夕私盟」、第二十七齣「馬嵬殺妃」、第二十八齣「梅妃投菴」、第三十四齣「南内思妃」の各齣について校合し、簡単な注を施したものである。その他の齣の校注については、順次続刊を俟ちたい。

三　底本は明・萬暦十八年序刊『新刻驚鴻記』（神田喜一郎博士舊蔵、大谷大学蔵。新刻本と略称する。）を用い、明・世徳堂刊『新鍥重訂出像附釋標註驚鴻記題評』（北京大学蔵、『古本戯曲叢刊』二集影印。標註本と略称する。）とあわせて校合する。また明・胡文煥『群音類選』（中華書局、一九八〇年影印刊）所収の『驚鴻記』も参照した。

四　標註本には、陳氏尺蠖齋（不詳）の手になる頭註を附載するが、本校注では「陳氏標註」として努めて採録した。

五　俗字や異体字、また特有のくずし字は、原則として旧字体の正字に復する。ただし、来・観・従・為・即など、底本のままを襲ったものもある。

六　神田喜一郎博士舊蔵本（新刻本）、『古本戲曲叢刊』二集所収本（標註本）の閲覧・複写にあたって、大谷大学図書館、京都大学人文科学研究所の御理解と御協力を得た。記して感謝する。

七　底本（新刻本）の刊行以来四〇〇年、『驚鴻記』の校注翻刻を試みるものは、本稿以前には聞かない。難字・句点・注釈等、校注者の浅学に因る幾多の粗漏を免れ得ないであろうが、諸賢の御指正を賜りたい。

『新鍥重訂出像附釋標註驚鴻記題評』序[1]

葉　德輝[2]

明皇・楊妃故事、唐人説部記載極詳。元・白仁甫演爲『梧桐雨』院本、是爲北曲之祖。明人以北曲不諧於笙笛、奮筆改竄、大失本眞。至呉世英[3]而有『驚鴻記』之作、屠赤水[4]又有『綵毫記』相輔而行。國朝洪昉思又有『長生殿』本傳世。自序謂「借[5]天寶遺事、綴成此曲。凡史家穢語、概削不書、非曰匿瑕、亦要諸詩人忠厚之旨」。前又有徐麟序、謂「『驚鴻』[6]不知何人作、詞不雅馴。『綵毫記』乃屠赤水筆、塗金繢碧、求一真語・隽語・快語・本色語、終卷不可得。試雜此曲于元人之間、直可並駕仁甫、俯視赤水。彼『驚鴻』者、又烏足云？」。信口抑揚、又不知『驚鴻』爲何人之作、大是可笑。不知洪本固為名作、何能與仁甫抗衡？　且三家本命意不同、詞各有當。仁甫專寫本事・藍本・唐人小説諸家、其詞如太羹玄酒、非肉食者所能知其味。屠作以太白為主人翁[8]、雖雕鏤之處頗多、亦緣本無綺語可采。呉作始終夾寫梅妃、觀其曲、終似為梅妃吐氣而作。立意既各有宗旨、偶爾繙閲、便謦謦論人短長、序書人大都如此、又何責于徐君乎？　夫明皇・楊妃、以荒淫幾至亡國。『唐書』正史[9]以及唐人小説、詩人歌詠、曾不能為之諱、何待洪之「匿瑕」[10]、便為空前絶後之作？　余嘗以為、賦變為詩、詩變為詞、詞變為曲、正是貞[11]下起元、始一終亥之理。元人專以本色語・白描手出之、真可上追『風雅』、下逐『離騷』。觀于臧[12]在晋所錄『百家』、雖経南人改換、尚有真面可尋。洪作即令當行、以曲之格律繩之、豈獨不能並[13]駕仁甫、亦並不能掩過『驚鴻』。此非深于曲律者不知、吾将有所發明、以俟

聆音者。[14]

宣統辛亥春二月花朝[15]　郎園識[16]　印

註

（1）北京大学図書館蔵本（本稿の所謂標註本）。恐らく葉徳輝自身の筆になるこの序は、『古本戯曲叢刊二集』所収本では削除されているが、荘一拂『古典戯曲存目彙考』（上海古籍出版社、一九八二年）九一〇頁に節録する。（2）一八六五同治四年――一九二七民国十六年。清の長沙湘潭の人。一八九二光緒十八年の進士。特に目録版本学に精通し、書林清話・観古堂書目・観古堂書目叢刻等の著書・出版がある。戯曲方面では「重刊『秦雲擷英小譜』序」「檜門観劇絶句序」等があるが、ここに翻刻する「『驚鴻記』序」は、葉徳輝のその他の出版著作中に検索することができない。『碑伝集補』巻五十三に許崇熙「郎園先生墓志銘」を収める。また受業の弟子松崎鶴雄『柔父随筆』所収「湖南の博学葉徳輝」に葉徳輝の精彩を伝える。（3）正しくは呉世美。（4）屠赤水、名は隆。浙江鄞県の人。一五七九萬暦七年の進士。戯曲をよくし、著に『曇花記』『修文記』『綵毫記』等がある。『綵毫記』は『六十種曲』所収。『明史』巻二八八に本伝がある。（5）『長生殿』洪昇自序。（6）『長生殿』徐麟序より節録したもの。一部表記の異同がある。徐麟（霊昭）は長洲の人。身世不詳。章培恒『洪昇年譜』二八一頁参照。（7）また大羹玄酒とも。太羹は味つけをしないあつもの。玄酒は酒つくり用の最高級水。後に転じて、詩文の古雅なる風格に喩える。『礼記』楽記に「大饗の禮は、玄酒を尚にして腥魚を俎にし、大羹和せざるは、遺味有る者なり」と。（8）屠隆『綵毫記』の綵毫はあやある美しい筆のこと。後に美麗なる詩文をも指す。『綵毫記』は、玄宗と楊貴妃の牡丹の花見を、李白が綵毫で以て美麗な「清平調詞三首」に詠み込む故事を描く。（9）たとえば『新唐書』巻五、玄宗本紀賛には「嗚呼、女子之禍於人者甚矣！」と概嘆する。（10）洪昇『長生殿』自序に「凡史家穢語、概削不書、非曰匿瑕、亦要諸詩人之忠厚之旨」とある。（11）天道人事が循環往復して止まないことをいう。清・陳廷焯『白雨斎詞話』巻八に「貞下起元、往而必復」と。（12）臧晋叔輯『元曲選』は一名を『元人百種曲』とも言うことから、この「臧在晋」も臧晋叔を指すと思われるが、臧晋叔を「臧在晋」と呼ぶ他の称謂例を聞かない。臧懋循、字は晋叔。浙江長興人、一五八〇萬暦八年の進士。（13）『長生殿』徐麟序に「試雑此劇于元人之間、直可並駕仁甫、俯視赤水。彼『驚鴻』者流、又烏足云」とあることへの葉徳輝の反論。（14）聆、原文は聆に作るが、意によって改める。聆は衆馬のこえ。聆は聡明に同じ。（15）一九一一年二月十一日、または十五日。葉徳輝四十七歳。（16）葉徳輝の号。郎園はひまわり園の意。

第十三齣　梅妃被貶[1]

〔綿搭絮〕（小生扮一軍校挪梅妃）（小丑扮高力士[2]随上）（旦唱）寒風絺綌[3]。只自怨凄凉。不道攪地翻天[4]。又做下雷霆冤禍秧。難猜想。高力士、不知楊妃謗我何事、遂至于此。（小丑）他説道娘娘私通太子、説詛君王、不是當耍。（旦唱[5]）他利口梟張。使奴遭刑枉死。誰白這行藏。（哭了[6]）罷罷罷　便縱有三老[8]鳴冤。他未解巫蠱情渺芒。那得個鴻臚高寢郎。

〔解三醒〕想當初。鳳蕭鸞帳。伴君王。懷中掌上。到今朝。似鷄臨湯火魂飛蕩。似黄葉。加雪上霜。空有千行流淚似哀湍瀉。又還須血化啼鵑繞建章。（小丑・小生）娘娘事出無奈、且往東市去罷。（旦作哭了[10]）君王君王、你好薄情呵。（旦唱[11]）梅亭上那盟言。都付煙草斜陽。（俱下）

（外扮宋王朝服上）「曾参豈殺人、飛燕在昭陽、感此不平事、批鱗逆聖皇」。自家宋王是也。吾皇聽讒、欲殺其子、并殺其妃。不免上丹墀、強諍一番。臣誠惶誠恐、稽首頓首。（作俯伏了[12]）（末扮黄門上）丹墀内[13]俯伏者是何官？（外）臣成器、為梅妃太子事、奏上吾皇。（唱）

〔前腔〕巧舌訛言從古有。雅度包涵是聖皇。况他們罪妃無顯狀。儲君美。似珪璋。曾聞得長門賦入追金屋。又道是矯殺扶蘇秦祚亡[14]。須参訪。莫教如東海。六月飛霜[15]。

（末）聖旨下、朕失徳于躬、致家庭謀逆、震怒非常、今聞讜言、敢不欽奉。梅妃免死、監候冷宮[16]。太子免死、廢為庶人、更屈皇兄、上花蕚楼咲語、以攄藹悶、毋得遲延。（外）萬歳萬萬歳。

（末）君王迷色更迷讒
猶幸從言似轉圜[17]
（外）只慮批鱗[18]無死志
那愁折檻不生還

註

（1）「被貶」の二字、新刻本（底本）では不鮮明。標註本によって補う。（2）「高力士」、底本は「力士」に作る。標註本による。（3）「絺紿」、陳氏標註に「絺兮紿兮、凄其以風、我思古人、実獲我心。此亦荘姜之詩」と。『詩經』周南、葛覃に「爲絺爲紿」とあるが、この註の出拠は不詳。（4）「攪地翻天」、標註本は「攪天翻地」に作る。（5）標註本は「唱」字を欠く。（6）「了」、標註本は「科」に作る。（7）「便」、標註本は「更」に作る。（8）「三老」、陳氏標註に「三老、通鑑、征和中、江充與太子有隙。持太子急、太子計不知所出。收補（捕）充等、斬之。長安擾乱、言太子反。帝在甘泉、詔捕斬反者、太子兵敗、南奔。上怒甚、壷関三老茂上書。上感悟、事寢」と。記事は『資治通鑑』巻二二、漢紀十四、武帝征和二（前九一）年條に見える。（9）「解巫蠱」、陳氏標註に「解巫蠱、又吏民以巫蠱相告言者、案驗多不實。上須（頗）知太子惶恐無他。會高寢郎田千秋上急変、訟太子冤、曰、子弄父兵、罪當笞。天子之子、過誤殺人、當何罪哉。上大感悟、召千歳（秋）謂曰、父子之間、人所難言、公獨明其不然。此高廟神霊使公教我。立拜千秋為大鴻臚」と。記事は『資治通鑑』巻二二、漢紀十四、武帝征和三（前九〇）年條に見える。（10）「了」、標註本は「科」に作る。（11）標註本は「旦唱」二字を欠く。（12）「了」、標註本は「科」に作る。（13）「丹墀内」、標註本は「丹墀中」に作る。（14）陳氏標註に「史記、趙高矯詔、殺扶蘇、立胡亥、而秦亡」と。『史記』巻六、秦始皇本紀参照。（15）「六月飛霜」、陳氏標註に「白帖、鄒衍事燕惠王、盡忠、王棄衍、之（々＝衍）仰天而□（哭）、六月霜降」と。『白氏六帖事類集』巻一、霜、「五月降霜」に引く『淮南子』に見える。『太平御覧』巻十四、天部、霜にも引く。なお「鄒衍降霜」は『蒙求』の標題。ここでは、本文に衍して「五月」を「六月」とした。（16）「冷」字、標註本は不詳。（17）「轉圜」、陳氏標註に「漢書、加以従諫如轉圜」と。『漢書』巻六七、梅福伝参照。（18）陳氏標註に「批鱗、韓子、龍之為物、可擾而馴也。然有逆鱗徑尺、膺之則殺人。人主亦有之。説者能無膺人主之逆鱗、則幾矣」と。『韓非子』説難篇に見える。

第十五齣　學士醉揮

〔胡搗練〕（生扮唐明皇、末・外扮二黄門上）（生唱）欣逢九塞烟消。閒来試向宮庭閒[1]。花去年年人易老。對金樽肯負花朝[2]。

寡人于東興慶池東、沉香亭前、植[3]牡丹百餘種、一向在宜春院、與諸王妃主・梨園子弟為驩、並不曾行幸。今已春季、此花必繁、寡人今欲飽玩此花、高歌暢飲、歡樂一回。左右的、快宣楊[4]妃子来。（末下）娘娘有宣。（貼扮楊貴妃、小旦扮念奴上、同唱）

〔燒夜香〕君王景福欝岧嶤。大内優游。共樂清朝。聞召。雙蛾自淡掃[5]。（小丑扮高力士、丑扮賀懐智、小凈扮李亀年、小末扮馬仙期、小外扮張野狐同上、唱）眉淡掃。偏映如花貌。更禱。廣樂鈞天。萬年皇造。（貼・小旦・小凈[6]等同俯伏了[7]）（貼）賤妾叩見、願陛下萬歳。（生）妃子少礼。寡人今日萬幾稍暇、見此名花、不可無國色共賞、特宣妃子出来。（貼）陛下乃天之子、牡丹乃花之王。賤妾寒質陋姿、恐不堪敵。（生）好説、好説。諸侍們快整酒来。（貼持盃跪了[8]）昨日西凉州貢蒲萄美酒。願陛下暢飲。（小旦接盃上[9]）

〔梁州序〕（貼唱[10]）清宮日永。竒葩星耀。好似方壺蓬島[11]。妾観此牡丹[12]呵。夜香凝露。朝来色褪紅妖。心自想舞慚飛燕。歌謝韓娥[13]。暗裏花還咲。朱絲[14]依寶瑟。雨雲饒。金屋相看豈阿嬌[15]。（合唱[16]）傾城態。雍門調[17]。況伶倫[18]衆技尤竒妙。真樂事。會今宵。

〔前腔〕（生唱[19]）靈芗香腴。神芝瓊表。（生對貼細看）怎比得天姿漂渺。遠山秋水。霎時一盼魂揺。更感你慇懃花下。罄折樽前。曲意伸譚咲。玉山猶未倒[20]。肯停消。擡取厭厭暮與朝。（合唱[21]）（同前）

（小丑俯伏了[22]）奴婢稟上爺爺、爺爺羯鼓、娘娘琵琶、馬仙期方響、李亀年觱角、張野狐箜篌、賀懐智手拍、廼是千古絶技。何不試演一番。（生）高力士、你不知道寡人賞名花對絶色、舊樂府厭聽、欲創為清平樂三首、被之鼓吹。你快與朕宣那翰林學士李白進来。（小丑）得旨。（下[23]）李學士有宣。（小生扮李白作醉状上）昨夜阿誰扶上馬、今朝不省下樓時。高力士、聖上召我何幹？（小丑作怒了[24]）唉、這個人狂妄、你不暁得我高常侍虎威、太子呼我為兄、諸王呼我為翁、附馬宰相叫[25][26]我是爺爺、你便叫我名字、這等可悪。（小生）高力士、我問你的事、你説我不問你的、你不要扯寛皮。（小丑）原来是醉漢、也不足計較。（丑[27]）你這個官兒、不要對了皇帝老官撤酒風、我每面前好撤得、這個老官面前撤不得的。你吃飯的家火留了好。（小生）不要胡説。（丑[28]）不知你胡我胡。（小生進俯伏了[29]）臣李白叩見陛下[30]、願陛下萬歳、母后殿下千載。（生）卿從何處軼宕、沉醉廼爾[31]。（小生）昨夜風清月明、臣向酒市中、連飲五百餘觴、至今猶苦宿酲、死罪死罪。（生）這是文人學士、一時遣興、但醉何妨。卿家起来、朕召卿別無事、牡丹是名花、妃子是絶色、卿是竒才。二美既具、似不可少卿家。今欲汝為清平詞三首、恐醉後未能卒就。（小生）臣生平但得斗

酒、便揮百篇。今憑餘醒、正奏薄[33]技。（生）高力士、你可取金花箋與李白。（小丑）領旨。（取箋與小生了[34]）（小生援筆立吟）第一首、「雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃。若非群玉山頭見、會向瑤臺月下逢。」第二首、「一枝濃艷露凝香、雲雨巫山枉断腸。借問漢宮誰得似、可怜飛燕倚新粧。」第三首、「名花傾國両相歓、長得君王帶咲看。解釋春風無限恨、沉香亭北倚闌干。」（小生跪了[35]）臣清平詞已完。（丑・小丑指小生打諢）不要説道做詩、你就是放屁、也不該是這等快。（生與貼同吟了[37]）（生）奇才奇才。（貼對生云[38]）妾聞漢司馬相如作子虛・上林、遊神蕩思、百日有餘、學士揮毫[39]俄頃。由此観之、相如不足数也。（生）李亀年、你們就把李學士詞、按歌佐酒。（小丑等俯伏[41]）領旨。（各持樂器奏了[42]）（生對旦云[43]）學士詞調固高、李亀年等声歌亦妙。朕與妃子将何以勞學士？高力士、你取玻璃盃来。（小生俯伏了）（生持盃）（小旦接與小生）

〔前腔〕（生・貼唱）羨君家。逸氣清標。今日裏[44]。輝煌廊廟。那漢庭司馬。怎及英豪。果是才高七歩[45]。書富五車[46]。三峽詞源倒。如朕與卿這等君臣呵　千年難一遇。地天交。肯使長沙[47]嘆寂寥。（合唱[48]）（同前）

（小生跪了[49]）微臣蒙聖上恩寵、無由圖報、願假御醞、権効嵩呼。（持盃進生了[50]、唱）

〔前腔〕願吾皇。壽比天高。（又持盃進貼了[51]）祈母后。齡同地老。更河清海晏。荒服来朝。但使宮中歓慶。與萬方同。到處歌魚藻[52]。微臣依大造。近雲霄。敢道樗材入譽髦[53]。（合唱）（同前）

（小丑・小净・小末・小外・丑・小旦跪了[54]）願爺爺娘娘再進酒。

〔節節高〕（衆唱[55]）紅雲捧帝郊。列瓊瑶。龍顔顧盻祥光照。秦筝巧。趙舞飄。燕歌繞。天成學士清平調。聲華一代原非少。惟願良宵定年年。名花傾國常歓咲。（生對小生云[56]）卿自稱斗酒百篇、無廼太譽。（小生跪了[57]）臣生平有詩云、「酒渇思呑海、詩狂欲上天。」海也要呑、何況斗酒？　（生）快取御前金斗来。（小净・小丑擡斗斟酒了[58]）（小生跪飲三斗、眠倒在地大叫）臣廼酒中之仙也。玉帝羌臣下界、為陛下修文。（生・貼大咲云[59]）有這等狂學士、天色将昏、樂戯已闋。朕與妃子還宮。高力士可扶着那學士、念奴持寶燭送還翰院。（生・貼・小外・小末・丑・小净唱[60]）惟願良宵定年年。名花傾國常歓咲。（同下）

（小丑扶小生起[61]）（小旦執燭[62]行、小生作大醉状）（小丑・小旦同唱）

〔前腔〕綸音下九宵。賞才豪。詞場結得君王好。金樽倒。玉燭消。瓊筵耀。矜才竟把黄門傲。君臣魚水何縁到。（同

前）

（小生自扯烏紗帽投地[63]）（小旦拾起了[64]）（小生又對小丑伸起脚[65]）高力士、你可與我脱了靴。（小丑作怒、不肯了[66]）（小生高叫[67]）若不脱靴、我就一拳打死你這斷。（小丑荒忙脱了[68]）（小生又跌倒）（小旦・小丑同扶起[69]）

〔尾聲〕（同唱[70]）沉沉醼酊迷歸道。（小生獨唱）忽憶前生事不遙。臣廼酒中仙也。玉帝羌[71]臣為陛下修文。我雖是謫仙人[73]。端不為偸桃[72]。

（小旦）方朔[74]金門狎
（小丑）班姬玉輦歡
（小旦）宮花一萬樹
今世幾人看（同下）

註

（1）「宮庭」、標註本は「宮闈」に作る。（2）「花朝」、陳氏標註に「花朝是三月三日」と。（3）「植」、標註本は「値」に誤る。（4）「楊妃子」、底本は「妃子」に作る。標註本によって改める。（5）「淡掃」、張祜（また杜甫？）の「集靈臺二首」其二に「卻嫌脂粉污顔色、淡掃蛾眉朝至尊」と（『全唐詩』巻五一一）。（6）「小凈」、標註本は「小丑」に作る。（7）「了」、標註本は「科」に作る。（8）「了」、標註本は「云」に作る。（9）「上」、標註本は「科」に作る。（10）標註本は「唱」字を欠く。（11）「方壺蓬島」、陳氏標註に「方壺即方丈山、蓬島即蓬萊。蓋三山或曰島、或曰壺、皆可通也」と。晉・王嘉『拾遺記』巻一に「三壺則海中三山也。一曰方壺、則方丈也。二曰蓬壺、則蓬萊也。三曰瀛、則瀛州也」と。（12）「牡丹」、陳氏標註に「楊妃外傳」と。宋・楽史『太真外伝』巻上に、宮中における牡丹花の鑑賞、及び李白「清平調詞」の記事が見える。（13）「韓娥」、陳氏標註に「博物志、□人之齊、王歌假食。既去、餘音遶梁三日」と。晉・張華『博物志』巻八に「昔韓娥東之齊、遺糧、過雍門、鬻歌假食而去、餘響遶梁、三日不絶」とある。（14）「朱絲」、明・胡文煥『群音類選』は「朱絃」に作る。（15）「阿嬌」、無名氏「漢武故事」に「若得阿嬌作婦、當作金屋貯之也」とある。（16）標註本は「唱」字を欠く。（17）「雍門調」、陳氏標註に「桓[?]

新論、雍門周鼓琴、孟嘗君曰、琴能使文悲乎。曰、足下千秋萬歲後、墳墓□荆〻游童□牧游其上、而歌曰、□□□□□□□□□□□□□□□□□□下、雍門周引琴鼓之君〻人而就之」と。漢劉向『説苑』巻十一に記事が見える。（□十八字三行分は原缺）（18）陳氏標註に「伶倫、古時楽官」と。『呂氏春秋』仲夏紀、古楽に見える。（19）標註本は「唱」字を欠く。（20）陳氏標註に「世説、人叔夜之醉也、頽然如玉山之将崩」と。嵇康（字は叔夜）の故事。『世説新語』容止篇参照。（21）標註本は「唱」字を欠く。（22）「了」、標註本は「云」に作る。（23）「下」、標註本は「下云」に作る。（24）「了」、標註本は「云」に作る。（25）標註本は「宰相」の二字を欠く。（26）「叫」、標註本は「呼」に作る。（27）標註本は「丑」字を欠く。（28）標註本は「了」字を欠く。（29）「丑」、標註本は「小丑」に作る。（30）「了」、標註本は「云」に作る。（31）「陛下」、底本は「陛陛下」に衍する。（32）標註本は「餘」字を欠く。（33）「奏」、標註本は「輳」に作る。（34）「了」、標註本は「科」に作る。（35）「了」、標註本は「云」に作る。（36）標註本は「是」字を欠く。（37）「了」、標註本は「科」に作る。（38）標註本は「云」字を加う。（39）陳氏標註に「西京雑記、司馬相如為上林、子虚賦。意思蕭散、不復與外事相関、控引天地、錯綜古今、忽然如睡、煥然而興、几百日而後成」と。漢・劉歆『西京雑記』巻二に見える。（40）「毫」、標註本は「笔」に作る。（41）「伏」、標註本は「科」に作る。（42）「了」、標註本は「畢」に作る。（43）「旦」、標註本は「貼」に作る。（44）「裏」、標註本は「裡」に作る。（45）陳氏標註に「七歩、魏文帝欲害曹植、令七歩成詩」と。『世説新語』文学篇に「文帝嘗令東阿王（曹植）七歩中作詩」とある。（46）「五車」、陳氏標註に「荘子曰、惠子名（多）方、其書五車」と。『荘子』天下篇参照。（47）「長沙」、陳氏標註に「史記、賈誼為長沙王傅」と。『史記』巻八四、賈誼伝参照。（48）標註本は「唱」字を書く。（49）標註本は「跪了」二字を欠く。（50）「了」、標註本は「酒科」に作る。（51）「了」、標註本は「科」に作る。（52）陳氏標註に「魚藻、詩篇」と。「魚藻」は『詩経』小雅の篇名。（53）「譽髦」、陳氏標註に「毛詩云、譽髦斯士」と。『詩経』文王之什、思齊の語。（54）「了」、標註本は「云」に作る。（55）標註本は「唱」字を欠く。（56）底本は「云」字を欠く。標註本によって加える。（57）「了」、標註本は「云」に作る。（58）「了」、標註本は「科」に作る。（59）底本は「云」字を欠く。標註本によって加える。（60）「唱」、標註本は「同唱」に作る。（61）「小丑」、底本は「小旦」に作る。標註本によって改める。（62）「執」、標註本は「持」に作る。（63）「投地」、標註本は「投地科」に作る。（64）「了」、標註本は「科」に作る。（65）「對小丑伸起脚」、標註本は「對小丑伸起脚云」に作る。標註本によって改める。（66）「了」、標註本は「脱靴科」に作る。（67）標註本は「云」字を加う。（68）標註本は「小丑作荒忙脱科」に作る。（69）標註本は「唱」字を加う。（70）標註本は「同唱」二字を欠く。（71）「羌臣」、底本は「差臣」に誤る。標註本によって改める。（72）「偸桃」、陳氏標註に「漢武故事、東郡送一短人、長五寸、衣冠具足。上疑其精、召東方朔至。朔呼短人曰、巨靈阿母還存否？　短人不對。方朔謂上曰、王母種桃、三千年一結子。此児不良、已三過偸之、失王母意、故被謫世」と。「漢武故事」は『藝文類聚』巻六九所引。（73）「謫仙人」、陳氏標註に「又賀知章見李白於長安、曰、卿謫仙人也」と。范傳正「唐左拾

遺翰林學士李公新墓碑」参照。（74）陳氏標註に「東方朔傳、待詔金馬門」と。『漢書』巻六五、東方朔伝参照。但し東方は複姓、名は朔。

第十六齣　梅妃宮怨

〔喜遷鶯〕（旦扮梅妃上、唱）真成薄命。想牛女無緣。羊車難聘。鳳侶鸞儔。當年繁勝。到今何處孤另。綽約三千一任。妬殺凄清誰並。紅綃袖。無言獨立。両涙盈盈。

「芙蓉不及美人妝、水殿風来珠翠香。却恨含情掩秋扇、空懸明月待君王」。奴家自被楊妃之譖、幾致殺身。幸蒙宋邸之援、尚囚別館、宴新婚誰怜孤影、歴寒暑不覺五年、正所謂憂心[1]悄悄、慍于群小、静言思之、寤辟有摽。

〔鴈魚錦〕無端懊恨追往年。向粧臺拂鏡花如面。宛轉。料那情不軽變。看他一似鳳鸞顛。賞踈梅。金縷管和絃。昭陽恩自專。那数三千的粉黛空腸断。我道是掌上君王。豈有長門怨。

〔二犯漁家傲〕那堪。勢異時遷。把五雲金屋。改做了棲閑[2]舘。凉風團扇。怎知道冷煖人情換。被君抛。長夜獨眠。被妃妬。相傾萬千。被臣謗。做衛姜宣。情和怨。将来訴與誰邊。扉掩。梨雲冷暮烟。那壁[3]廂。咲咱是箇趁東西。紛亂的墻外柳。這壁[4]廂。咲咱是箇踰春夏。蕭[5]條的江上蓮。

〔二犯漁家燈〕熬煎。滿地碧苔。又奈他斜陽電掃誰相[6]戀。明月朱簾。惨殺庭院。忽覺西宮。火照喧闐。分明難遣。他奉恩[7]複道[8]。我自擁餘衾小簟。只為那梅亭月上生幽賞。落得蹙損雙蛾両涙縣。

〔喜源澄犯〕幾廻夢裡。雨雲[9]歓忤。驚鴻舞。忙吹玉笛。同升輦侍宴。待覺来。朦朧峭然。雲迷雨離。啼着杜鵑。要見只憑假寐還相叙。甚時節真個團圓。教我怎理花鈿。他那裡。融融春煖承歓地。俺這裡。寂寂秋歸離恨天[10]。

〔錦纏道犯〕謾回首。這心腸。終須辨冤。浚下繞寒泉。豈玉容懐着日影。孤妍。殢人的掠鬢寶鴛。侵人的梁間雙燕。

総好夢也難連。待把黄金倩個相如賦[11]。只恐天高未暇憐。

寶瑟金樽依漢皇
三千粉黛妬昭陽
離宮怨婦鳴箏坐
風送歌聲轉断腸

註

（1）陳氏標註に「憂心四句、俱詩経」と。『詩経』邶風、柏舟に「憂心悄悄、慍于群小。覯閔既多、受侮不少。静言思之、寤辟有摽。」とある。（2）「閑」、標註本は「門」に作る。（3）・（4）「壁」、標註本は「辟」に作る。（5）「蕭」、新刻本・標註本ともに「簫」に誤る。（6）標註本は「相」字を欠く。（7）「奉」、標註本は「秦」に誤る。（8）「複」、『群音類選』は「複」に作る。（9）「雨雲」、『群音類選』は「雲雨」に作る。（10）陳氏標註に「離恨天、見佛書、在三十三天之上」と。三十三天は『阿毘達磨倶舎論』巻十一に見える。（11）「相如賦」、陳氏標註に「□□□武后失寵居長門、奉百金司馬長卿・文君取酒、期為解憤之詞。相如為作長門賦、以悟主上」と。『文選』巻十六、司馬相如「長門賦」参照。

第二十三齣　七夕私盟

〔出隊子〕（旦扮梅妃上、唱[1]）飄零珠翠。飄零珠翠。日暮梁園[2]落葉飛。繁霜怯盡小腰肢。金歩廻羞玉輦随。（丑扮一宮女上、同唱[3]）乞巧[4]今宵。負却佳期。

（旦）「栗栗空庭氣、蕭蕭過鴈呼。君恩似秋葉、日日向人踈」。奴家自翠華閣召幸之後、又已両年。宮毎春而必華、草無朝而遺露。感秋風於衰木、縦咲傲之弗顧、何以永今夕也？（内鳴鼓）（末戎粧飛馬扮驛使上、唱[5]）

〔前腔〕看　天河嘉會。天河嘉會。一[6]騎紅塵咲語開。無人将是荔枝猜。等得欽生帝子懐。（旦對丑云）[7]楼外有一騎喧呼、你去問他是何處驛使。（丑）領娘娘旨。（出問了）[8]你那漢子何處[9]到此？（末）我是驛使。（丑）得非嶺南梅使乎。（末）我是閩中人。七月安得有梅、這個人好不明白。（丑）呸。你不為踈梅。誰要你来。（将末推下）（丑跪了）[10]奴婢覆上娘娘、外邊喧呼的、廼庶邦貢楊妃果寔使来。（旦）你曾問他否？（丑）奴婢問他、説你那漢子既是貢鮮、怎広不貢些與我梅娘娘、他説往年梅娘娘喜梅、所以庶邦貢梅。近年宮中不聞説有梅娘娘、只[11]説楊娘娘喜荔枝。所以庶邦貢荔枝、那梅久不貢了。（旦作悲了）[12]天呵、好苦楚人也。「琪樹西風枕簟虚、楚雲湘水憶當時。君王自棄驚鴻舞、不貢踈梅貢荔枝」。（同下）（生扮唐明皇、貼扮楊貴妃、小丑扮高力士、小旦扮念奴上）

〔醉扶歸〕（生・貼唱）酷炎炎餘暑侵空沼。碧澄澄閒鳧狎素濤。只思量蕭颯又経秋。怎當他宛囀如聞鳥。朧朧樹色映天高。凄凄幽緒逢時巧。

（生）「霽天湛碧好新凉、風月驪山此夜長」。（貼）「千里露華供遠目、十年芳草繫幽香」。（小丑）「染雲為幌清依夢、借月鉤簾望断腸」。（小旦）「痴殺世間児女子、紛紛乞巧鬪流黄」。[13]（生）今夜是幾鼓了？[14]（小丑・小旦俯伏了）[15]夜已三更、[16]請爺爺娘娘安寝。[17]（生）高力士・念奴各退、諸侍衛者俱散處。東西廂不得近前。（小丑・小旦）謹領旨。（作起了）[18]（小丑）「金屋粧成嬌侍夜」。[19]（小旦）「玉楼宴罷醉長春」。[20]（同下）（生對貼云）今夕是七月七夕、牽牛織女相見之時。秦人風俗、張錦繡、陳飲食、樹花、燔香於庭、號為乞巧、宮掖間尤尚之。[21]朕與妃子、試玩月曉以踵秦俗何如？（貼）但憑聖裁。（生携旦同行了）[22]

〔醉罷歌〕（生唱）[23]此夕此夕河橋處。相見相見牛郎女。明朝烏鵲下繁枝。説向青楼侶。朕想那個牛郎織女初相見的時節呵迢迢郎意。盈盈女私。天衢漢路。含羞倍姿。夢魂擬逐陽臺雨。（生抱旦云）[24]朕得妃子、就如牛郎得織女。只恐易盡今生、未結来生、各墜迷塗、遂捐誠念。待朕今夕與汝對天私誓。（生拜天了）[25]（貼隨後亦拜）（生唱）星為聘。月作媒。天呵、我李隆基不願為天子、只願做一個編戸之民、得美麗的楊玉環、世世為婦。莫似牛郎會少見還稀。（生作起立了）[26]（貼）賤妾蒙吾皇恩恋、一至于此。（對生拜謝了、[27]貼唱[28]）

〔前腔〕薄倖薄倖長門事。買賦買賦[29]臨卭子。氷壺到底不蒙緇。誰似君王意。妾想那個牛郎織女、當時若没有那烏鵲幇襯

呵、嫦娥孤另。瑤臺自依。襄王朝暮。巫山路迷。芳心各付閬風去。（貼[30]對生云[31]）妾得事陛下、就如織女遇牛郎。只恐無福能消、有心莫報、壽殀難料、悲楽互生。待妾祈禱蒼穹、誓酬聖眷。（貼[32]獨向天拜了[33]、獨[34]唱）星為聘。月作媒。天呵、我楊玉環不願為后妃、只願做一個江村之婦、得風流的李三郎世世為夫。莫似天河織女隔年期。（生抱貼起了[35]、生[36]獨唱）

〔香柳娘〕覷[37]卿卿艷肌。覷卿卿艷肌。高唐神女。羅紈綺繢鳴瓊琚。轉心魂怖迷。轉心魂怖迷。朝日寤明輝。夜月留容裔。妃子爾道朕是何等人？　是章華情緒。是登徒[38]性氣。向洛水逢伊。擦陽城[39]已矣。（貼對生獨唱）

〔前腔〕盼霓裳羽衣。盼霓裳羽衣。驚鴻何似。他凌波廻雪非容易。（生）妃子爾又過謙了。那驚鴻之舞、怎生便到得爾霓裳羽衣？（貼獨[40]唱）謝君王不遺。謝君王不遺。琴瑟永歡愉。金蘭洽恩契。君王還記往時情事否？　是空江委翠。是隔墻殘李。見華燭堪羞。見寶釵猶妮。（生・貼合唱[41]）

〔前腔〕羨天河事奇。羨天河事奇。今来古去。年年此夜歓相會。起情人望思。起情人望思。雲夢去探奇。芝田還覓侶。快今生可矣。快今生可矣。任傾國傾城。儘為雲為雨。

〔尾聲〕恩情占断人間麗。莫認做遊絲飛絮。看萬歳千秋鸞鳳儀。

（生）七月七日長生殿[43]
夜半無人私語時
（貼）在天願為比翼鳥
在地願為連理枝

註

（1）標註本は「唱」字を欠く。（2）陳氏標註に「梁園、梁孝王兎園」と。『史記』巻五八梁孝王世家に見える。（3）標註本は「同唱」二字を欠く。（4）「乞巧」、陳氏標註に「遺事、七月七日、宮中以錦結成樓殿、高百尺、上可容數十人。陳以瓜果酒

炙坐具以祀牛女、曰乞巧」と。五代・王仁裕『開元天宝遺事』「乞巧樓」に見える。（5）標註本は「唱」字を欠く。（6）陳氏標註に「唐詩、一騎紅塵妃子咲、無人知是荔枝来」と。杜牧「過華清宮絶句三首」（『樊川詩集』巻二）の一節。拙稿「楊貴妃の笑い」（『中国詩人論』汲古書院、一九八六年）参照。（7）底本は「云」字を欠く。標註本によって加える。（8）「了」、標註本は「科」に作る。（9）「何處」、底本は「何故」に作る。標註本によって改める。（10）「了」、標註本は「云」に作る。（11）「只」、底本は「這」に作る。標註本によって改める。（12）「了」、標註本は「科」に作る。（13）陳氏標註に「流黄絹名、六朝詩、中婦織流黄」と。古楽府「相逢行」に「中婦織流黄」とある。（14）標註本は「是」字を欠く。（15）「了」、標註本は「云」に作る。（16）「三更」、標註本は「三鼓」に作る。（17）「娘娘」、標註本は「娘」に作る。（18）「了」、標註本は「科」に作る。（19）白居易「長恨歌」に「金屋粧成嬌侍夜、玉樓宴罷醉和春」と。（20）底本は「云」字を欠く。標註本によって補う。（21）陳鴻「長恨歌伝」に「秋七月、牽牛織女相見之時。秦人風俗、是夜張錦繡、陳飲食、樹瓜華、焚香於庭、號爲乞巧。宮掖間尤尚之。」とある。（22）「了」、標註本は「科」に作る。（23）標註本は「唱」字を欠く。（24）底本は「云」字を欠く。標註本によって補う。（25）「生拜天了」、標註本は「拜天科」に作る。（26）「了」、標註本は「科」に作る。（27）「了」、標註本は「科」に作る。（28）標註本は「貼」字を欠く。（29）陳氏標註に「買賦已見」と。『驚鴻記』第十六齣「梅妃宮怨」に「把黄金倩個相如賦」とあるのを指すか。（30）標註本は「貼」字を欠く。（31）底本は「云」字を欠く。標註本によって補う。（32）標註本は「貼」字を欠く。（33）「了」、標註本は「科」に作る。（34）標註本は「獨」字を欠く。（35）「了」、標註本は「科」に作る。（36）標註本は「生」字を欠く。（37）「卿卿」、陳氏標註に「世説、王渾妻鍾氏每卿其夫。渾曰、婦人卿夫、於礼不宜。鍾曰、憐卿愛卿、所以卿卿。我不卿卿、誰復卿卿？」と。『世説新語』惑溺篇に王安豊とその婦人の会話として見える。（38）「登徒」、陳氏標註に「登徒子好色賦。登徒子則不然。其妻蓬頭攣耳、齞脣歴齒、旁行踽僂、又疥且痔。登徒子悦之、使有五子。王孰察之、誰爲好色者矣。」と。『文選』巻十九、宋玉「登徒子好色賦」参照。（39）「陽城」、陳氏標註に「又嫣然一笑、惑陽城、迷下蔡」と。同じく『文選』巻十九、宋玉「登徒子好色賦」参照。（40）標註本は「獨」字を欠く。（41）標註本は「唱」字を欠く。（42）「今」、標註本は「令」に作る。（43）陳氏標註に「四句、長恨歌」と。白居易「長恨歌」参照。

第二十七齣　馬嵬殺妃

（小旦扮唐太子上）[1]「漢國山河在、秦陵草樹深[2]。暮雲千里色、無處不傷心」。自家大唐太子李璵是也。父王幸蜀、着俺統領前軍[3]。

誰想行未十日、路已絶糧、軍士頗出不遜之言、待陳将軍来、再作區處。（外戎粧扮陳玄礼上）（浄・末・丑・小浄・小外扮作[4]衆軍隨上）（外）「東皐薄暮望、単騎欲何依。軍士驚秋色、長歌悲采薇」。（俯伏了）[5]臣陳玄礼参見殿下。願殿下千歳、千千歳。[7]（小旦）陳将軍請起、将軍既統大衆、軍士有不順令者、當斬一二首級、以警其餘。（外）軍士不勝飢餓、微有怨言。伏惟天寛地容、慎勿明刑激変。（小旦）既如此、将軍可出去勧慰軍士一番。（外）臣謹領旨。今晩衆軍士多分不肯行了、殿下請安寝、明日早行。（小旦）依卿所謂。（下）（外）大小三軍、一路労苦你們了。（衆軍）[8]虧你説、也差不多。（外）恐有[9]賊兵追求、今夜[10]要你們連夜趕行。（衆軍）[11]両日没有粥飯吃下肚了。要我們連夜趕行、只看得、不去了。[12]（外）一定要煩[13]你們去。（衆軍）[14]不去、不去、決不去。（外）軍士听我道来。

〔園林好〕你休埋怨今朝絶糧。魯孔顔。也在陳魔障。[15]（浄・丑）[16]哈呀、你好高比。孔夫子是個聖人、高懐大度、便餓他一百日、也不惱。我們是飲食之徒、餓到明日、就要發忖了、不敢欺。（外）哎、我還有個比方與你聴。（唱）[17]曾記滹沱漢将。尋麥飯。待君嘗。尋麥飯。待君嘗。[18]

（小外・小浄）我們這等時節、若尋得一碗麥飯、只好救活自家、奉不得君皇、竈君皇帝不識字、直奏。（外唱）

〔嘉慶子〕你君臣大義心自想。豈可為怨饑相忘。（丑・浄）君臣大義、我們也曉得。只是一件、[19]待吃飽了、去做忠臣。（外）哎、餓死事極小、忘君事極大。（唱）商士首陽餓死。[20]他摠是報君王。他千古美名揚。

（末作起立了）[21]元帥與言及此、小的両腋風生。（向衆軍云）[22]列位老哥、今夜還是去。（浄）哈呀、惶恐、好忠臣、你自去、我們不去。（丑）我們記得、當初做守衛皇城軍、一日每軍給米貳升、銀貳分。那支發軍糧的官員、要甚[23]広常例、每軍減下米壹升、銀壹分、不要説養老婆、自家常是餓的、豈但今日？（作哭了）[24]苦惱也、苦惱也。（外）原来有這等弊情。[25]此是官吏之罪、聖上不知。（浄）我們還記得聖上當初、詔楊国忠判度支事。那楊国忠苛刻聚歛、迎合君王。聖上因此寵他、驟遷相位、擅意誅殺軍官。你道軍官減下我們錢糧、也出無奈、要輸到他相府去。君王朝歓暮楽、恋酒迷花、怎知有我們、如今却又苦死用着我們也。[26]（作哭了）[27]苦惱苦惱。（外）軍士們、君雖不仁、臣不可以不忠、父雖不慈、子不可以不孝。（唱）

〔尹令〕君王雖然孟浪。[28]到離亂。何須煩嚷。忍他式微中露。[29]忍他獨行原上。勧汝休狂。急趕相随到蜀江。

（小外）是這等説起来、一定要趕我們去的説話了。（浄作哭了）[30]我的兒、我的兒。（衆）呸、誰是你的兒子。（浄）我年紀老大、止生

得一個牙[31]児、臨動身的時節、児子扯住我説道、「爺哈、你到巴蜀、我在長安。雲山萬重、那説個生離、只當是死別」。(丑作哭了)[33]我的娘、我的娘。(衆)你娘在那裡?[34] (丑)我家娘在長安。臨別時、娘説「我児哈、自小抱你在胸前、吃妳妳、只恐養你不大。如今養大了、你却又抛我去也」。(小浄作哭了)[35]我個娘子、我個娘子。(衆)你的老婆怎広説? (小浄)我不瞞列位、我做親方得三日、含涙而行。那娘子嬌滴滴的聲音、説道夫哈、「三日夫妻、你東我西、從此長夜、為君擣衣」。如今我随駕来了。聞得安禄山已進長安、那娘子此時被這些番兵搂去睡了、也不可知。(作哭了)[36](外)衆軍士休要啼哭、這父母妻子、我也有的、到今日、却顧不得了。(唱)[37]

〔品令〕伊行到此。為何戀家鄉。銅駝荆棘[38]。須取誼勤王。匆匆相向。淚揮新亭上[39]。男子育養。誰是個無娘無父。不娶妻房。你們衆軍呵　效漢王陵[40]效杞梁[41]。

(丑・浄)元帥強逼我們、只得便去。但是許你一日、明日没有飯吃、一定都逃走了。(外唱)[42]

〔豆葉黄〕這忠心可強。你亂言切莫攔儅。看多少敗國亡君。看多少敗國亡君。却有個忠臣良将。有些禽獣。背君反常。你們列位都請回罷。哎、陳玄礼是個好漢、安能處小朝廷求活耶。(作拔劍向北拜了)[43][44]高祖[45]太宗之靈在上、陳玄礼自盡陳玄礼的事、也強不得衆軍。(唱)[46]臣是孤身旅况。臣是孤身旅况。怎糾得千軍。解得紛紛禍殃。

(衆軍忙走上、奪外劍了)[47]元帥、我們去也、我們去也、不要刑害我們。(衆軍同下跪了、唱)

〔二犯六么令〕元帥你　肯為國家身喪。頓教人。忠心激揚。縱山川道路多艱。何憚風霜。從此去生離死別。不思故郷。只是今日大駕蒙塵、都由楊国忠兆乱。不殺此賊、死不瞑目也。(唱)[48][49]這奸賊摠難忘。望元帥。斷然主張。

(外)頃間殿下有命、軍士們、急斬此賊回報。(衆軍[50]响應了)[51]得令。(丑)我去殺這入娘的。(浄)還是我。(齊趕下)(小旦上)「一夜欹寒枕、長安[52]夢不還」。(外)殿下又早起也。(小旦)夜聞軍士怨聲愈煩、怎生是好。(外)臣千言萬語、勸解他們。他只[53]説不斬楊国忠、断然不随駕。臣已矯殿下令旨、衆軍攘臂歓呼、争殺此賊。伏乞赦臣矯制之罪。(小旦)此孤之夙憤也。将軍何罪。(生扮唐明皇上)「去国三巴遠、征途数鴈横」。(貼扮楊貴妃上)「客心争日月、来往預期程」。(小丑扮高力士上)「秋風不相待、先至錦江城」。(小旦・外俱俯伏了)(小旦)臣李璵叩見父皇。(外)陳玄礼叩見殿下。(生)卿家少礼。朕道前軍星夜已行、尚何留滞。(小旦)臣等欲行、衆軍士不听。臣叩其故、皆切齒楊国忠。(生)呵、有這等事。(内鳴鼓了)[54]衆軍持楊国忠頭趕上)已借尚方劍、趨斬侯頭。(同

跪了[55]）楊[56]国忠與吐蕃謀反、臣等按法行誅。（生）反賊既誅、汝等可収隊前去。（衆軍）臣等不敢奉詔。（作起了[57]）（生）且問你們、為何不奉詔。（衆軍）国忠謀反、貴妃不宜供奉。願聖上[58]割恩正法。（生）貴妃深居宮中、安知国忠反状。（外俯伏了[59]）貴妃誠無罪、然将士已殺国忠、而貴妃在陛下左右、豈敢自安、願殿下深思之。将士安、則陛下安矣。（貼向生作悲跪了[60]）陛下須遠計宗社、何恋一妃。妾誠負国、死無所恨。（生）今日之事、是朕累妃子耳。妃子何負于国家。（相抱作悲了[61]）

〔月上海棠〕（生唱[62]）我自想。漁陽叛逆天災降。怎教伊負冤銜屈把身亡。（貼唱[63]）非謊。妾死為伊消怨望。區區此身。何愛閒風浪。少甚紅粧。婉孌君傍。十年一夢歸塵網。（小旦扯生了[64]）願父皇寛懐。（小丑扯貼了[65]）願娘娘節哀。

〔五韻美〕（生唱[66]）長生可想。牽牛可望。望織女。天河断腸。付啼涙瀟湘。（貼唱[67]）夢陽臺楚王。魂杳杳。天地黒霓裳。

（生・貼合唱[68]）早也知今日好撇様。何似當年。你参我商[69]。

（貼作拔釵了[70]）當初入宮之時、定情之夕、妾蒙吾皇賜以金釵鈿合、如今奉還。（生看釵）可不痛殺我也。（共貼作哭倒了[71]）（小旦忙扶生起了[72]）（小丑忙扶貼起了[73]）

〔江児水〕（小旦・小丑唱[74]）眼見得今朝慘。多由夙世殃。人生聚散原飄蕩。（生・貼・丑唱）西宮南苑誰為賞。秋蓉春柳空江上。被底鴛鴦[75]。寵想。寂寞琵琶。冷入梨雲哀爽。

（衆軍跪了[76]）望陛下割恩正法。臣等奉詔収隊也。

〔川撥棹〕（貼唱[77]）喧和嚷。端只求。殘命喪。（生唱[78]）我　做天子。救不得椒房。我　做天子。救不得椒房。山萬疊。凄然夕陽。你芳年。人早亡。我翻稱。人未亡[79]。

（貼）願大家好自珍愛、遂置誠念。（生）願妃子善地托生、相結後縁。（貼）賤妾從此拜別。（向生作拜了[80]）

〔一撮土〕（貼唱[81]）慇懃謝。（生）你謝朕有甚広来？（貼唱）謝君王。恩誼長。向與奴紫磨金。釵合上。若心似金堅[82]。管取地府天堂。與你盈盈相向。（小旦扯生了[83]）（小旦扯貼了）（貼唱）遠分離。恨怎當。（生唱[84]）近分離。我就亡。（小旦扶生下）

（貼）高力士、十餘年生受你了。（小丑跪哭了[85]）奴婢服事娘娘十六年。娘娘怎割捨得奴婢、待奴婢也尋個自盡罷。（貼）説那裡話。你且聴我道来。（唱[86]）

〔尾聲〕我別伊頃刻歸天上。你為我堅心奉聖皇。（小丑作哭了[89]）娘娘、哈、奴婢謹領娘娘的教訓。（貼合小丑唱）心只恨胡児多跳踉。（貼作縊死、下）

（外）大小三軍聽我将令、貴妃已縊死佛堂梨樹下[90]、可各収隊趕行。（衆應了[91]）得令[92]。

（丑）君王遊樂萬機軽
一曲霓裳四海兵[93]
（衆）宛轉蛾眉馬前死[94]
故宮惟有樹長生

註

（1）標註本は「云」字を加う。（2）「草樹」、標註本は「莫樹」に誤る。（3）「前軍」、標註本は「三軍」に作る。（4）標註本は「作」字を欠く。（5）「采薇」、陳氏標註に「采薇、詩篇。軍士成（戍）役者、思帰之作」と。『詩経』小雅に「采薇」篇があり、その序に「采薇、遣戍役也」と述べる。（6）「了」、標註本は「科」に作る。（7）底本は「千千歳」三字を欠く。標註本によって補う。（8）標註本は「軍」字を欠く。（9）「有」、標註本は、「那」に作る。（10）「今夜」、標註本は「今晩」に作る。（11）標註本は「軍」字を欠く。（12）底本は「了」字を欠く。標註本によって補う。（13）「煩」、標註本は「央」に作る。（14）標註本は「軍」字を欠く。（15）「在陳魔障」、陳氏標註に「魯論、在陳絶粮。又見家語・荘・列諸書」と。『論語』衛霊公篇に「在陳絶糧」とあり、同様の故事は『孔子家語』在厄篇、『荘子』天運、山木、譲王の各篇、『列子』力命、楊朱の各篇等にも見える。（16）「凈・丑」、標註本は「丑・凈」に作る。（17）標註本は「唱」字を欠く。（18）陳氏標註に「東観記、大司馬秀至薊、會王子接、起兵薊中、以應王郎、城内擾乱。秀趣駕而出、至益莫(?)亭。時天寒冽、馮異上豆粥、渡滹沱。至南宮。遇大風、秀引車入道旁空舍。馮異抱薪、鄧禹爇火、秀對竈燎衣。馮異又上麥飯」と。『後漢書』巻一、光武帝本紀にも見える。（19）標註本は「只是一件」四字を欠く。（20）陳氏標註に「伯夷傳、武王既克商、伯夷叔斉恥食周粟、既餓且死。又魯論、伯夷叔斉、餓于首陽之下、民到于今稱之」と。『史記』巻六一、伯夷列伝、および『論語』季氏篇に見える。（21）「了」、標註本は「云」に作る。（22）底本は「云」字を欠く。標註本によって補う。（23）「軍」、標註本は「官」に作る。（24）「了」、標註本は「科」に作る。

(25)「弊情」、標註本は「情弊」に作る。(26)陳氏標註に「備極情景」と。(27)「了」、標註本は「科」に作る。(28)「孟浪」、陳氏標註に「莊子、夫子以為孟浪之言」と。『莊子』斉物論の語。(29)陳氏標註に「毛詩、式微式微、胡不帰。又曰、微君之故、胡為乎中露」と。『詩経』邶風、式微の語。(30)「了」、標註本は「云」に作る。(31)「牙児」、標註本は「孩児」に作る。(32)陳氏標註に「絶倒絶倒」と。(33)「了」、標註本は「云」に作る。(34)「裡」、標註本は「里」に作る。(35)「了」、標註本は「云」に作る。(36)「了」、標註本は「科」に作る。(37)標註本は「唱」字を欠く。(38)陳氏標註に「晋書、索晋(靖)指宮門銅駝曰、會見汝在荊棘中」と。『晋書』巻六十、索靖伝に見える。(39)「新亭」、陳氏標註に「又、過江人士新亭飲。周顗歎曰、風景不殊、舉目有江山之異。相視流涕」と。『世説新語』言語篇参照。(40)「王陵」、陳氏標註に「王陵母死於楚事、見漢書」と。『漢書』巻四十、王陵伝に見える。(41)「杞梁」、陳氏標註に「孟子、杞梁之妻善哭其夫。事見左傳為詳」と。『孟子』告子下に「華周・杞梁之妻、善哭其夫而變國俗」と。また『左伝』襄公二十三年にもその故事を述べる。(42)標註本は「外唱」の二字を欠き、「豆葉黄」の下に「外」字を付す。(43)「向北」、底本は「北向」に作る。標註本によって改める。(44)「了」、標註本は「科」に作る。(45)陳氏標註に「極有感發」と。(46)標註本は「唱」字を欠く。(47)「了」、標註本は「科」に作る。(48)「瞑目」、底本は「瞑日」に誤る。標註本によって改める。(49)標註本は「唱」字を欠く。(50)標註本は「軍」字を欠く。(51)標註本は「了」字を欠く。(52)「長安」、標註本は「長夜」に作る。(53)「只」、底本は「這」に作る。標註本によって改める。(54)「了」、標註本は「科」に作る。(55)「了」、標註本は「云」に作る。(56)陳氏標註に「事具楊太真外傳」と。宋・楽史『楊太真外傳』下に「軍士呼曰、楊國忠與蕃人謀叛」とある。(57)「了」、標註本は「科」に作る。(58)「聖上」、標註本は「陛下」に作る。(59)「了」、標註本は「云」に作る。(60)「了」、標註本は「云」に作る。(61)「了」、標註本は「科」に作る。(62)標註本は「唱」字を欠く。(63)標註本は「唱」字を欠く。(64)「了」、標註本は「科」に作る。(65)「了」、標註本は「科」に作る。(66)「生唱」二字、標註本は「五韻美」三字の前に付する。(67)陳氏標註に「轉顧前七夕私誓有情」と。第二十三齣「七夕私盟」を参照。(68)標註本は「唱」字を欠く。(69)「生・貼合唱」、底本は「生合貼唱」に作り、標註本は「生・貼合」に作る。(70)陳氏標註に「此所謂一曲霓裳四海兵」と。唐・李約「過華清宮」詩に「君王遊樂萬機輕、一曲霓裳四海兵」とある(『全唐詩』巻三〇九)。なお、本齣の下場詩は李約のこの詩句二句を引用する。(71)「了」、標註本は「云」に作る。(72)「了」、標註本は「科」に作る。(73)標註本は「了」字を欠く。(74)「了」、標註本は「科」に作る。(75)標註本は「唱」字を欠く。(76)標註本は「唱」字を欠く。(77)陳氏標註に「被底鴛鴦已見」と。第十二齣「興慶晝娛」に「鴛鴦被底心」とあり、その陳氏標註に『開元天寶遺事』「被底鴛鴦」の故事を引く。(78)「了」、標註本は「云」に作る。(79)標註本は「唱」字を欠く。(80)標註本は「唱」字を欠く。(81)陳氏標註に「禮、婦人未死、稱未亡人、此翻意也」と。「未亡人」の語は『左伝』成公九年に見える。(82)「了」、標註本は「科」に作る。(83)標註本は「唱」字を欠く。(84)「心似金堅」、陳氏標註に「此長恨

歌所謂金釵一股合一扇」と。白居易「長恨歌」に「釵留一股合一扇、釵擘黄金合分鈿、但令心似金鈿堅、天上人間會相見」とある。（85）標註本は「了」字を欠く。（86）標註本は「唱」字を欠く。（87）「了」、標註本は「科」に作る。（88）標註本は「唱」字を欠く。（89）「了」、標註本は「云」に作る。（90）宋・楽史「太真外伝」下に「力士遂縊於佛堂前之梨樹下。」と。その他、馬嵬殺妃の場面は多く「太真外伝」に拠る。（91）標註本は「了」字を欠く。（92）底本は「得令」二字を欠く。標註本によって補う。（93）唐・李約「過華清宮」詩中の詩句。註（70）参照。（94）白居易「長恨歌」に「宛轉蛾眉馬前死」と。

第二十八齣　梅妃投菴

〔香柳娘〕（旦扮梅妃上）嘆顛危路岐。嘆顛危路岐。兵戈亂離。居民擾攘歸何處。是霓裳攪禍。[1]是霓裳攪禍。我　苦盡不甜来。你　樂極還悲至。咲梅亭永誓。[2]咲梅亭永誓。誰共驩娛。誰遭顛沛。

（内鳴鑼鼓大叫）（旦作悲了[3]）你看四野喧天震地、都是賊兵、教奴怎生躲避？　罷罷罷、多少皇子皇孫妃主、不得從駕者、悉為蕃兵所殺、何况多年貶下的梅妃。前面有口古井、待跳下溺死罷。（作跳井了[4]）且住、前面是玄都観。奴家初選入宮之時、曾與高力士暫息此間。記得有個悟真師姑、不知尚在否？（唱[5]）

〔前腔〕我心中自思。我心中自思。再無活計。向空門受戒圖存濟。只有一件、那荒寺雖可避亂離、奈皇妃又不當穏便。但宜改名易姓、説做村婦田姑。又想這場大禍、明是楊太真所召、此行他未必能偸生。奴家留得残喘、俟天下太平、或者與君王重圖驩會、未可知也。且休稱帝妃。且休稱帝妃。[6]姓字漫重題。身軀或堪寄。倘君王再會。倘君王再會。暫借慈航。痴心望海。（丑扮老尼姑上、唱）

〔前腔〕聽哀啼女児。聽哀啼女児。（旦作悲了[7]）可憐救奴一命也。（丑）呀、忙来問取。是何名何姓誰居住。（旦唱[8]）吳二娘是予。吳二娘是予。北虜馬驕嘶。[9]南枝鳥投息。（丑唱[10]）你元来避地。你何須隕涕。玉冷粧臺。鐘鳴暮雨。

（丑）相伴入松雲

川原杳何極
（旦）日暮飛鳥孤
征車逐不息

註

（1）標註本は「是霓裳攬禍」のリフレーンを欠く。（2）第二齣「梅亭私誓」参照。（3）「了」、標註本は「科」に作る。（4）「了」、標註本は「科」に作る。（5）標註本は「唱」字を欠く。（6）標註本は「且休稱帝妃」のリフレーンを欠く。（7）「了」、標註本は「云」に作る。（8）標註本は「唱」字を欠く。（9）「古詩十九首」其一に「胡馬依北風、越鳥巣南枝」と。（10）標註本は「唱」字を欠く。

第三十四齣　南内思妃

〔破齊陣〕（生扮唐明皇上、唱）老去慵看舞袖。秋来懶聽歌喉。寂寞良辰。蕭條清晝。却又難捱更漏。情到不堪回首處。教人難付與東流。傷心怕景幽。

「去者日以疎、来者日以親。昔日歌舞臺、今見丘與墳。白楊多悲風、蕭蕭愁殺人。夢想近容輝、欲見道無因」[1]。朕遭家不造、致京都失守。伏吾兒與諸将戮力、雖際昇平、然新愁與舊恨兼併、愈深悲感、對景傷情、好難遣也。

〔風雲會四朝元〕你看　風光如舊。怕登花萼楼。那鶯啼西内。花落南牖。燕子初歸後。教人怎便丢。想着那　傾國名花。舞袖歌喉。兩處恩情。一般僝僽。左右揀消瘦。嗏　早知道恁般愁。何似當初。休與通情竇。生離便死休。一日腸廻九[2]。沉吟低首。最難捱過。是月明時候。

梅妃梅妃[3]、你為玉真所妬、冷落離宮。意欲調和両情、使你同諧百歳。不料卒然禍起、今日還宮。已難起玉真于九泉、尤想申梅

亭之永誓、遍訪民間、未見踪跡。不知死于乱軍之手、還是流落他方。我想與你時[4]

〔前腔〕翠華聚首。盈盈淚兩眸。驩娛無幾。誰料出醜。只得把你相抛後。你也不索嗔咎。也不索槳咎。情性温柔。悽涼耐久。露冷閒房。苔侵朱牖。甘與梅花瘦。嗏　猛自裏細追求。于你何尤。教你空閨自厮守。痴心他轉頭。好與驩依舊。誰道終難見你。這場冤恨。向誰分剖。

朕自馬嵬変後、與玉真夢想雖親、終是幽明相隔。近遣高力士同念奴、前往馬嵬移葬、還不見回報、好傷懷也。

〔前腔〕與你　馬嵬分手。芳魂異域投。我也吞聲難宥。掩面難救。不是心抛後。但含冤自羞。但含冤自羞。更想你姐妹恩深。弟兄情厚。萬種憂皇。一心病疚。人比黄花瘦。嗏　空自裡結綢繆。一旦分儔。教我向誰開咲口。相思無盡[5]頭。待抛難罷手。天長[5]地久。何如那日。紅羅同朽。

〔前腔〕年華迤逗。傷懷不耐秋。縱便是羅綺相親。歌舞相侑。消不盡眉児皺。想今生已休。想今生已休。禁不過月冷衾鴛。香消鑪獸。海様牽愁。天還知否。只恐和天瘦。嗏　少甚麼皓齒與明眸。只道我少小風流。老况難相就。雖然老[6]易休。只是難忘舊。這場姻盟。便歸地府。也要重圖邂逅。

新愁舊恨知何盡
花蕚歌聲永不傳
無復綺羅嬌白日
直将珠玉閉黄泉

註

（1）『文選』巻二九「古詩十九首」其十四に「去者日以疎、生者日以親。出郭門直視、但見丘與墳。古墓犂爲田、松柏摧爲薪。白楊多悲風、蕭蕭愁殺人。思還故里閭、欲歸道無因」と。（2）陳氏標註に「太史公與任安書、腸一日而九廻」と。『文選』巻四

一、司馬遷「報任少卿書」中の語。（3）陳氏標註に「按梅妃在太真時已死。此亦傳奇之体然與」と。通行本「梅妃伝」を按ずるに、梅妃は安禄山の乱兵の手にかかって殺される。従ってその死は楊貴妃の死の数日前である。「伝奇の体の然りとするなり」とは、団円に導く南曲『驚鴻記』において、その梅妃を乱中に生き延びさせ、玄宗と対面させた事をいう。三十六齣「入観遇梅」参照。（4）底本は「時」字を欠く。標註本によって補う。（5）陳氏標註に「此即長恨歌所謂『天長地久有時尽、此恨綿々無絶期』」と。白居易「長恨歌」は終結の二句を採る。（6）「老」、標註本は「花」に作る。

補註

○前稿『驚鴻記』校注第七齣「花蕚驚鴻」〔對玉環帯過清江引〕中の「扇欹」字について、『群音類選』（明・胡文煥編、中華書局、一九八〇年影印）は「扇歌」に作る。

○同第七齣「花蕚驚鴻」〔醉翁子〕中の「挨沉醉」とあるのを「擡沉醉」に訂正する。

○同第七齣「花蕚驚鴻」〔前腔（＝僥僥令）〕中の「啼鳥喚」について、『群音類選』は「啼鳥緩」に作る。

○同第七齣「花蕚驚鴻」〔尾聲〕中の「令徳」字について、『群音類選』は「今徳」に誤る。

○同第二十一齣「翠閣好會」〔北鴈兒落〕中の「又恐怕」字について、『群音類選』は新刻本に同じく「又恐他」に作る。

○同第二十一齣「翠閣好會」〔北鴈兒落〕中の「裁今」字について、『群音類選』は「纔今」に作る。

○同第二十一齣「翠閣好會」〔北沽美酒〕中の「記曾」字について、『群音類選』は「幾曾」に作る。

○同第二十一齣「翠閣好會」〔南醉歸遲〕中の「裁是」字について、『群音類選』は「纔是」に作る。

○同第二十一齣「翠閣好會」〔南朱奴兒〕中の「管取」字について、『群音類選』は「管教」に作る。

○同第三十九齣「幽明大會」〔南步步嬌〕中の「環珮聲」を「環珮聲聲」に訂正する。

○同第三十九齣「幽明大會」〔北折桂令〕中の「早知」字について、『群音類選』は「早知道」に作る。

○同第三十九齣「幽明大會」〔北鴈兒落〕中の「馮誰」字について、『群音類選』は「憑誰」に作る。

○同第三十九齣「幽明大會」〔北收江南〕中の「謀王定伯」字について、『群音類選』は「謀王定霸」に作る。

○同第三十九齣「幽明大會」〔北收江南〕中の「端的要沉溺」字について、「端的要沉溺、端的要沉溺」に訂正する。

○同第三十九齣「幽明大會」〔北收江南〕中の「候君歸」字について、『群音類選』は「侯君歸」に誤る。

○同第三十九齣「幽明大會」〔北沽美酒〕中の「夢荘周、蝴蝶飛」について、『群音類選』は「夢荘周、蝴蝶飛、夢荘周、蝴蝶飛」に作る。

○前稿「校注驚鴻記㈠」所収「驚鴻記叙」中の「鮑蕭」の語の註として、「鮑は鮑叔のこと。管仲を窮困から救った。『列子』力命篇参照。蕭は蕭何のこと。韓信を薦めて大将とした。『漢書』巻三十九参照。」を追加する。また同じく「晉楚」の語の註として、「楚は細腰の女性を好んだ楚の霊王の故事。」を追加する。

○同前稿「校注驚鴻記㈠」所収「驚鴻記叙」中の「搴裳涉溱、乗蔺觀洧」を「搴裳涉溱、乗蔺觀洧」に訂正する（康保成氏の御指教による）。

※本稿葉徳輝序の読解および前稿「校注驚鴻記㈠・㈡」の誤りについて、康保成氏（本学外人教師、中山大学）の御指教を忝くし、また標註本『驚鴻記』影印本の借閲について、友人福満正博氏の協力を得た。記して感謝する。